

ロマンティック・イロニーの謎？

——高木昌史教授定年退職に寄せて

富  
山  
典  
彦

ぼくがまだ院生で、修士論文も書いていなかった頃、生野幸吉先生がこう言われた。君たちは、引用するにしても何をするにしても、厳密にやらなくてはならないよ、うろ覚えで書くなど厳禁である、と。その生野先生自身は詩人で、厳密性などとは無縁の領域に踏み込まなくてはならないはずだから、その道の大家になったら別だけれど、と付け加えることをお忘れにならなかった。

あれからもうかれこれ四十年、その道の大家になどなれずに終わりそうだが、それでも、うろ覚えの知識ばかりが増えてしまい、それを封じ込めておく心の部屋も手狭になってしまった。高木昌史教授の定年退職記念号だから、論文でもエッセイでもない、中途半端な文章を書かせてもらおうことにする。

高木さんとの出会いは、ウィーンから帰ってきてまだ日も浅かったころ、日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』の編集委員の話がいきなり舞い込んできたときのことだ。「いきなり」というのは、そもそもこの話がぼくにではなく、当時一橋大学にいた井上修一さんのところに来たものだったからだ。

実は、ウィーンに行く前に、ぼくはオーストリア文学研究会（現在はオーストリア文学会）の研究会誌立上げに関わって、そのまま初代編集委員の一人になっていた。その縁で、オーストリア政府から奨学金をもらい、ウィーンに留学することができたのだが、このとき知り合った人たちのなかに、あの井上靖の息子で、おもにシュニツラーを研究対象にしていた井上修一さんがいたのである。

ウィーンから帰国して聞がなかった井上さんは、忙しくてとても自分には学会誌の編集委員の仕事はできないが、その仕事は是非富山さんに回すべきだと、次期編集長予定者であった神品友子先生に、このぼくを推薦してくださったのである。

学会とは面白いもので、すでにどこかで知り合っていた人と再会することもあれば、もちろん新たな出会いもある。高木さんは後者だが、高木さんは当時國學院大学にお勤めで、そこには、ウィーン留学のときにウィーン大学の先生を二人も紹介してもらった、オーストリア文学研究会の村山雅人さんがいた。世の中、本当に狭いものである。

編集委員会は、編集委員の勤務先をあちこち転々として開催された。もう記憶も薄れてしまったが、編集長の鶴見大学と、渋谷駅から少し歩いたところにある國學院大學は、強く印象に残っている。

ぼくは大阪の天王寺高校の出身なのだが、旧制中学時代に釈超空、折口信夫がいたそうで、同窓生の著作などを収めた桃蔭文庫でこの法名のようなペンネームを目にして、ある種の違和感を抱いていた。この折口信夫が教授を勤めていたのが、まさに國學院だったのである。

國學院といえば神道、だから正門を入ったすぐのところにな小さな鳥居がある。この鳥居を横目に見て、高木さんが用意してくださった部屋で、応募されてきた論文について議論を戦わせる。その論文を学会誌に載せるか載せないか、載せるとしたらどこを訂正してもらおうか、載せないとしたらどういう理由によるのか、編集委員の見識が問われる。

ぼくはもともと、下手くそな小説や詩を書いていた人間だから、こういう議論が苦手であり、いろいろ苦労も多かったが、高木さんの柔らかな口調には、ずいぶん救われた。

委員会の後は必ず飲み会になる。今ではもう、こういう集まりに出る元気もなくなってしまうが、当時はいろいろな会に積極的に参加した。國學院から渋谷駅まで、かなりの道のりではあったが、高木さん

と並んでゆっくり歩いたことを覚えている。

この編集委員会には、神品友子編集長なればこそその委員として、藤本淳雄先生がいらっしやった。名前はもちろん知っていたし、当時はオーストリア大使館が春の学会の折にパーティーを開き、オーストリア文学者たちを招待してくれていたから、そこでお目にかかったこともあった。しかし、編集委員会で一緒に仕事をさせてもらったことで、駒場時代に一度もドイツ語を習うことのなかったこの有名な先生と、間近で話すことができた。

学問は一人きりでやらねばならない、ということとは、何も今更言うべきことではあるまいが、さまざまな人との関わりもまた、学問の道に生きるためには大切なことだ。いくつかの出会いがあり、また別れもあるが、これこそがまた、一つの道に生きることの醍醐味であろう。

高木さんは、この三月に定年で成城を去られるわけだが、成城との関わりは、専任としてはほくの方が長いが、非常勤の期間を入れるとぼくよりずっと長い。ぼくを学会の編集委員会に導いた井上修一さんも、編集委員会で一緒に仕事をした高木さんも、ぼくが成城に来るより前から成城の非常勤をなさっていた。そしてもう一人、学会の重鎮藤本淳雄先生は、駒場を定年退職後、成城の教授をされていた。直接的には、藤本先生に声をかけていただいたことがきっかけではあるが、ぼくと成城との関わりの底には、ぼく自身が意識していない何か深いものが潜んでいそうである。ちなみに、藤本先生の声がもう一日遅かったら、ぼくは別の大学に移動していて、そろそろもう定年を迎えていたかもしれない。

関東平野の北西のはずれにある埼玉医科大学から、こうしてぼくは、都内の閑静な住宅地にある成城大

学に移ってきた。それまで、ドイツ語の初級さえ教えていれば職務の大半をこなしていられたが、卒論指導をはじめとして、ほくにはなかなか荷が重い。しかしその分また、学ぶことも多い。

ただ、これより少し前に、大学設置基準の大綱化が発せられ、第二外国語八単位必修というフェンスが消滅した。これはとりわけ、われわれドイツ語教員にとっては重大問題であった。ドイツ語を半ば強制的に履修させられていた学生が、その桎梏から解放されたのだから。非常勤に行っていたある大学から、専任のある人は自発的に辞めていただきたいという、事実上の解雇通告があった。もつとも、新年度になってみると、意外にドイツ語の履修者が多くて、四月になってから、非常勤をお願いできないかという依頼がきたこともあった。

しかし、全国的にみると、ドイツ語履修者の減少は紛れもない事実であり、ほくが成城に移ってきたとき、学科に所属しない中国語の教員が採用されたことが、それを象徴的に語っている。中国語の躍進とドイツ語の凋落、それに比べると、フランス語は、少なくとも成城の例を見る限り、安泰と言えるし、専任のいないイタリア語でさえ、ドイツ語履修者の数をわずかに凌駕する勢いであった。

ヨーロッパ文化学科には十六人の専任がいて、ドイツ語とフランス語はそれぞれ五人、対等の関係にあった。履修者数は一对二どころか、一对三に迫る勢いで、井上修一さんが「都内に残された最後のオアシス」と称えた成城でさえ、この状態がいつまでも続くことなど、望むべくもなかった。

藤本先生を皮切りに、一人、また一人と定年退職されていくが、補充は行われない。ほくが成城に来たときに、ドイツ史学の大家であった成瀬治先生に、「君は形式的には濱川君の後任なのだから、しつかり

やるように」と励まされたが、その頃にはまだ後任人事というものがあつた。ここで話に出た濱川祥枝先生自身も、「成城はいいところですよ。きちんと後任を取ってくださいからね」とおっしゃっていた。

第二次ベビーブームが去り、少子高齢化が叫ばれ始めたご時世、大学設置基準の大綱化を契機に、大学は人員削減の方向に大きく一步踏み出していた。ぼくが着任するまでは、何とか成城はこの時流に流されることはなかったが、もちろん、それがいつまでも続くことなどあり得ない。学部全体の教員数を六九人から五五人にすることが、いつの間にか決定されてしまったのだ。

五人いたドイツ語担当者が、とうとう三人になり、次はぼくと横塚先生の二人になってしまうという直前になって、ようやく一人補充してよいことになった。

もしも後任人事が普通に行われていたら、こんな人はどうかと目を付けていた人たちを採用できていただろうが、そういう人の目を引く若手は、次々と他の大学に掠られてしまっていた。今回は、ぼくと横塚先生の間に、かなりの年齢差があるから、それを埋める年齢の人という条件が与えられた。そこで選ばれたのが、高木さんということになる。

横塚先生が採用人事審査報告の主査、ぼくは副査の一人となつた。どういふ審査報告をしたのか、もうよく覚えていないが、高木さんは、ドイツ・ロマン派からスタートし、グリム兄弟に大きく前進しようとしていた頃だつたと思う。ぼく自身の専門は両大戦間時代のオーストリア文学だが、ドイツ・ロマン派には昔から興味があつたし、グリムのメルヘンについてのさまざまアプローチについても、一通りの知識はあつた。

とはいえ、専門家とほくのよような素人とは大きな差がある。審査のために読んだ高木さんの論文には、いろいろな点で啓発された。とくにグリムのメルヘンのルーツに対する視線は、興味深かった。

ご本人とって何よりも大事なことは、成城の住宅地にはかつて柳田國男が住み、その膨大な蔵書が大学に寄付されて、それをもとにした民俗学研究所があることだ。ぼく自身も柳田國男はほとんど読んでいたが、この研究所との関わりは持てないでいた。

高木さんはもちろん着任早々、この研究所からお声がかかり、早速その重要なメンバーになったようだ。学部でも、高木効果と呼ばれる現象が生じ、大学院受験者が数倍に増加した。彼らの目指す研究対象は、もちろんグリムのメルヘンとそのルーツであった。彼らが無事にヨーロッパ文化専攻の院生になったとき、民俗学研究所の予算を利用して、研究チームが立ち上がった。それも高木さんの、その温厚な見かけからは計り知ることの難しい実行力のなせる技であろう。

学科ばかりではなく学部をまたいだ教員の参加を得て、院生の教育をも含んだ研究チームは、定期的に研究会を開催したばかりではなく、研究調査ということで、遠野に出かけることもあった。残念ながら高木さん自身は、岳父逝去のため、予定していた調査旅行に参加できず、期せずしてぼくが団長のような存在になってしまったが、院生たちはさぞ不満だったろう。

また、民俗学研究所に併設されている柳田文庫から、外国語の文献を調査して、欧米の文化がいかに柳田の日本民俗学の成立に影響を与えたか、というようなことを、高木さんの采配で各自に割り当てられる。暇を見つけては柳田文庫に通い、柳田自身の書き込みを見ながら、それらの文献を読み、柳田の著作と比

較する。もちろん、書き込みだから、何と書いてあるのか判読が難しく、研究所の所員の方々におおいに助けられたことは言うまでもない。本来は、ドイツ文学者として、自分の研究対象にしている作家の手書きの原稿などに向き合わなくてはならないのだが、その研究者の醍醐味を、柳田文庫で味わえたことは、なんと表現していいかわからないが面白い。

出版社との交渉から原稿の校閲まで、高木さんの尽力により生まれたのが『柳田國男とヨーロッパ 口承文芸の東西』（三交社、二〇〇六年）である。その後も高木さんは精力的に、口承文芸関係の仕事に取り組み、論文はもちろん、翻訳も多数出されているし、さらに、ロマン派と同時代の巨匠ゲーテにも果敢に挑みかかり、その美術論の編訳さえ出版されている。

学会の編集委員会で出会った高木さんとは、教授会でいつも向かい合わせに座っていたが、その間に着々と自分の学問世界を広げ、定年を目前にして、その原点であったヘルダーリンに戻り、出版助成を受けて『ヘルダーリンと現代』（青土社、二〇一四年）を出版された。その審査を担当したのもこのほくではあるが、何もしないまま高木さんを見送ることになるほくの怠慢さが恥ずかしい。

最後に、若き日にドイツ・ロマン派に憧れたとき、ロマンティシエ・イロニーという謎に突き当たったことで、この稿を締めくりたい。有名なロマン派の合わせ鏡の比喻については、だいたいこんなところかと理解することができたが、このイロニーが何であり、また具体的にどんな作品に適用されるのか、今なおぼくにとっては謎のままだ。いつだったか、あるドイツ人に、イロニーという語の意味がよくわからないと言ったことがある。ドイツ語のイロニーを英語のアイロニーや日本語の皮肉に置き換えたりし



たら、ますます意味不明になってしまいが、そのドイツ人は即座に、アップシュタントだと答えた。この語を説明的に訳すとすれば、ある対象から距離をとる、とでもなるだろうか。そうすると、イロニーというドイツ語の意味することが、少しは見えてくる。対象に同化することなく、つねに一定かどうかはわからないが、ともかく距離をとる、ということになる。

卒論指導を通じて、ぼく自身もいろいろ学ばされることはあるが、トーマス・マンの『ペニスに死す』をテーマに選んだ学生がいて、トーマス・マンのイロニーという観点からこの作品を読み解こうとしている。最近は便利な世の中になって、ネットで紀要論文などをダウンロードすることができる。その学生もぼくが指示したわけではないのに、ちゃんとトーマス・マンのイロニーについて論じた論文をプリントアウトしてぼくのところを持って来る。その論文の記述をぼくなりて理解したうえで、その学生とイロニーについて語り合う。そこから、イロニーの意味がかなり鮮明に浮かび上がってくる。

マンからおよそ一世紀も前のロマン派の時代、イロニーはどんなものだったのかということについては、ここから何も出てこない。もちろん、例えばノヴァーリスやティークの作品から、何かほんやりしたイメージが見えてこないわけではないが、逆にこの曖昧さそのものがロマンティッシュ・イロニーというものの特徴なのかもしれない、などと勝手な想像を思い巡らす。恋人の墓の前で、恋人への愛を究極に高めることによって死ぬると、ノヴァーリスは考えるのだが、どんなにその愛を高めてみても死ぬことはない、そのかわり、何か神秘的な体験をするのである。

それがぼくの探し求めるロマンティッシュ・イロニーという謎の正体だと考えるのは、さすがに浅薄な

解釈だろう。

教授会でいつも向かい合わせにすわっていて、同じドイツ語教員としていろいろな場面で同じ仕事をした高木さんに、最後にひとつ質問をすることが許されるとすれば、このロマンティッシュ・イロニーというものを、高木さんほどのようなものとして考えているか、いや、その目に見ているのか、あるいはその耳に聞こえているのか、それともその感性に何が感じられているのか、話してもらいたかった。

いやいや、この謎は、いつまでもぼく自身には解き明かされない謎として残しておこうか。それこそが、イロニーそのものなのかもしれない。